

横顔

就任インタビュー

見続けてきた変遷 改革と連携の礎に

埼玉県立循環器・呼吸器病センターの病院長に、
2024年4月、同院で26年を過ごしてきた池谷朋彦氏
が就任した。高い専門性を強みとする同院。経験を生
かし、今後、どう運営していくのか。

地方独立行政法人埼玉県立病院機構
埼玉県立循環器・呼吸器病センター

いけやともひこ

池谷 朋彦 病院長

1986年富山医科薬科大学(現:富山大学)医学部卒業。
同大学附属病院、埼玉県立循環器・呼吸器病センター
副病院長などを経て、2024年から現職。

地方独立行政法人埼玉県立病院機構 埼玉県立循環器・呼吸器病センター
埼玉県熊谷市板井1696 ☎048-536-9900(代表)
<https://www.saitama-pho.jp/junko-c/>



コロナ対応終息 患者を呼び戻す

「当院は循環器・呼吸器病、脳血管障害の各分野で高度専門医療の提供をしています。患者数を新型コロナウィルス感染症流行前の状態に戻すことが、私の役割の一つです」と語る。流行期、病院名に「呼吸器」

を掲げる同院では、重症者を含む多くのコロナ患者を受け入れた。一方で、限られた人材、設備、財源で新型コロナに対応するためには、救急や紹介患者の受け入れを一部制限せざるを得なかったという。「結果、現段階でも患者さんが十分に戻ってきてはいません。まずは、『通常通り診療できる状態に戻つてい

る』ということを、近隣医療機関の先生方に、お伝えしたいと考えています」

院内・地域の 救急対応力を強化

救急医療にも力を入れる同院。「特に脳神経外科の過去5年の救急応需率は93・5%と高く、脳卒中などの急患

をほぼ断らず受けています。心臓外科、血管外科は急性大動脈解離や大動脈瘤破裂、循環器内科では急性心筋梗塞症や狭心症など、1分1秒を争う患者さんを可能な限りお受けしています。ただし、当院でどんな患者さんでも受けられるわけではないのが現状です」とし、救急の受け入れ拡大も模索する。

「今後は、救急医もしくは総合診療医を数人確保して、どんな救急患者でも、一旦、受け入れられるようにしたい。診断、初療をした上で、循環器、呼吸器病、脳血管障害以外の高度専門医療が必要であれば、別の医療機関に紹介する形が取れないかと考えています」。埼玉県北部の救急医療提供体制の充実、さらには同院に入院する患者の院内発症への対応力強化の面でも、救急医や総合診療医が必要だと考えているという。

専門性打ち出し 予防医療にも注力

「近年は低侵襲治療を希望する患者さんも増えていることから、TAVI、マイトラクリップ、胸腔鏡下手術などを積極的に実施しています」。こうした治療を行う一方で、今後の「伸びしろ」として考えているのが「呼吸器疾患の診療」と腹部に対象を絞った「検診」だ。

「患者さんに『先生、この病院は肺がんも診るのですか』と聞かれ、驚いたことが

あります。がん診療は、がんセンターや大学病院ですると思っている方が多いようなのです」。池谷氏が同院に赴任してから30年弱。肺がんの患者数は増加していると推測されるものの同院で診る数は、ほぼ横ばいだという。

「当院は呼吸器外科医が7人所属し、高度放射線治療装置も有するなど高い専門性が特徴の一つ。肺がんの患者さんに当院を選んでいただけるよう、強みをアピールしたい。同時に、誤嚥性肺炎やマイコプラズマ肺炎なども、中等症から重症まで幅広く診ていることを広報していきます」

また、大動脈瘤検診も開始した。「血管外科の先生方が地域に出向く中で、別の目的で実施した腹部エコーによつて大動脈瘤が見つかる例があることに気付いてくれたのです」。大動脈瘤は、破裂した場合の致死率が80%超とされ、未破裂状態での発見と予防的治療が重要だ。また、同院の主軸である循環器・呼吸器疾患は冬季の発症が多いことから、夏の患者数の落ち込みが課題となつているが、それも検診によつて軽減できると考えている。

「動脈瘤だけでなく、肺がんなどが見つかった場合も当院で対応可能。一方で専門外の疾患は地域の専門医療機関に紹介します。『検診』と『すみ分け』で、患者、地域の医療機関、当院のいずれにとつても、良い状態をつくっていきたいですね」